

平成28年度第4回古賀市子ども・子育て会議 議事録

開催日時	平成29年1月23日(金) 13:30~15:00		
開催場所	サンコスモ古賀 201 研修室	公開の可否	可
事務局	保健福祉部子育て支援課	傍聴者数	0人
公開しなかった理由			
出席者	委員	井上 豊久会長 梯裕子委員、角森輝美委員、加藤典子委員、桑野嘉津子委員、 下川由貴子委員、末次威生委員、薄秀治委員、高橋千里委員、 中田拓弥委員、松尾恵美子委員、大和郁雄委員	
	事務局	市長、青谷保健福祉部長、村山子育て支援課長、 坂井こども係長、洪田家庭支援係長、長野健診指導係長 新本こども係員	
	その他		
議題	<ul style="list-style-type: none"> ・子ども・子育て条例(仮称)経過説明 ・古賀市子ども・子育て支援事業計画進捗管理 		
配布資料	<ul style="list-style-type: none"> ・子ども・子育て条例策定スケジュール ・古賀市子ども・子育て支援事業計画進捗管理に係る聴取希望事業について 		

○次第

1. 保健福祉部長あいさつ
 2. 会長あいさつ
 3. 子ども・子育て条例（仮称）経過説明
 4. 古賀市子ども・子育て支援事業計画進捗管理
 5. その他
-

平成28年度第4回古賀市子ども・子育て会議（会議概要）

1. 保健福祉部長あいさつ

利用定員変更についての諮問書を市長から子ども・子育て会議会長へ渡す。

2. 会長あいさつ

3. 子ども・子育て条例（仮称）経過説明

（審議）

（事務局）

子ども条例（仮称）については、昨年6月に諮問を行い、2回の会議及び文書にてご意見をいただく等、短期間に内容の濃い協議をしていただいたところである。

その結果、昨年12月に事務局案を示したところだが、再度慎重に内容の精査をすべく、条例の議会上程を12月議会まで延長することとなった。期間を延長するにあたっては、教育部との協議後素案を作成し、2、3月頃子ども・子育て議会以外の市民の声を聞くことも検討している。併せて条例をわかりやすくするための逐条解説のついても案を作成し、4月頃子ども・子育て会議に案を提出する予定である。

こちらについてもまたご意見をいただくようお願いする。

（井上会長）

4月に協議して、5月に答申の流れでよいか。

（事務局）

見込みのとおり。その後8月に市民の声を聞くパブリックコメントを行い、その後寄せられた市民からの案を踏まえて、最終案を会議に提示したい。

（井上会長）

その後12月に上程と言うことか。

（事務局）

見込みのとおり。

(井上会長)

条文中の「生きる力」「生きぬく力」の定義についてはいかがか。

(事務局)

「生きる力」については文部科学省の現行学習指導要領にて「知・徳・体のバランスのとれた力」という定義付けがされており、また「変化の激しいこれからの社会を生きるために、確かな学力、豊かな心、健やかな体の知・徳・体をバランスよく育てることが大切」とうたわれている。「生きぬく力」についての表記もあるが、「社会を生きぬく力」という表現に留まっている。そこで12月に示した案においては「生きる力」に統一したものである。

その他の変更点としては「PTAの役割」と「医療機関の役割」について、「市民の役割」や「事業所の役割」に包含されているため、削除している。

(井上会長)

前回会議の中で「生きぬく力」を使うということとしていたが、学習指導要綱の中でも「生きる力」がうたわれていることから「生きる力」に統一したいという事務局の申出である。この件について意見はあるか。

(梯委員)

「生きる力」の表現で良いと思う。

別件になるが「地域団体の役割」の中で「地域団体は、子どもが豊かな心、生きる力及び社会性を養うための体験活動及び知識習得等の機会を提供するよう努めるものとする。」と示されているが、私は「生きる力」の中に「心」も内包されているかと思っていたが、このみ力と心が併記されている。今は「力」が求められがちだが、「心」も大事にしてほしい。条文中「生きる力」の部分に「豊かな心」を併記できないか。

(松尾委員)

困難に立ち向かう心を育てていきたいが、苦手なものから逃げようという傾向にあるように感じる。梯委員の心を大切にしたいという意見に賛成する。

(高橋委員)

遊びを取り入れた支援に携わっている。色々な年齢の子どもと会うことが多いが、引っ込み思案な子どもが増えたように感じる。子どもたちに勇気を与えたいと心がけているが、まだ足りないと反省している。「豊かな心」とは具体的に何か。それを子どもたちに伝えていきたい。

(井上会長)

「豊かな心」を具体的にどう表現するか。条例はあくまで基本的な事項ではあるが、市民にわかりやすい表現にしたいとも考える。

(大和委員)

やはり「地域団体の役割」のみに併記されているのは、違和感を感じる。併記することで、「力」と「心」の大切さを強調できるのではないか。それが最終的には啓発にもつながると思うので、梯委員の案に賛成する。

(高橋委員)

「生きる力」という言葉は改めてとても強い印象を受ける。

(大和委員)

スキルも能力も全て力であり、力ばかりを強調するのではなく、心も加えるということでも良いのではないか。

(井上会長)

「生きる力」と記載されている部分に「豊かな心」を併記してはいかがかという委員の意見である。

(事務局)

併記の有無について、違いを考慮したわけではない。統一すべきと考えるので、改めて検討したい。

(井上会長)

委員からの意見であるので、一考すること。
他に意見はあるか。

(角森委員)

「古賀市らしさ」を入れた方がいい。古賀市では地域団体の力は強いと感じるなのでその関わりなどはどうか。反面個人の活動は希薄に感じる。

(井上会長)

条例上の文言としては難しいと思うが、市民提案を予算化する施策を行う自治体もある。

(高橋委員)

アンビシャス広場について、古賀市では全小学校区に存在している。保護者を募って行っているが、個々で行っている傾向がある。市が開催する会議等で一堂に会する場はあるが、連携は困難に感じる。

(井上会長)

中間支援組織を介してボランティアを繋げている自治体もある。ちなみに地域団体の連携については、既に条例の中に盛り込まれている。

(高橋委員)

以前も意見として出したが、言葉が硬い。市民への啓発であるならば、市民にわかりやすく、また目をひく言葉をいれるべきではないか。

(加藤委員)

古賀市らしさとしては、現在盛り込まれている人権教育がある。他には古賀市には小1プロブレム、中一プロブレムに向かっていく姿勢があると感じる。姿勢だけでは、と感じるかもしれないが、これはとても大切である。これを踏まえて基本理念の中に「一人一人、発達に応じた学びの場を提供する」等の言葉を盛り込んではどうか。

(松尾委員)

特別支援に携わっているが、古賀市では同級生も含めた全員で障がい児を見守る体制をとっており、とても手厚いと感じる。

(井上会長)

現在の条例は子ども全体を見るような表現になっているので、3条に「一人一人の」という表現を入れてはいかがかという提案である。事務局で検討すること。

条例の名前について、前回までは仮称として「子ども条例」となっていたが、今回の案では「子ども・子育て条例」となっている。この経緯はいかがか。

(事務局)

この条例が「子育て支援を総合的・計画的に推進するための基本を定めた条例」という位置づけであるため、いわゆる「子どもの権利条例」との違いを明確にするため、条例名の変更を検討したものである。

(井上会長)

権利だけではなく、子育てに係る各役割を明確にしようという市の意見である。委員から意見はあるか。

(薄委員)

良いと思う。

(末次委員)

子育てを社会全体で支える理念が盛り込まれており、子どもだけの条例ではない。条例名に「子育て」を入れることで市民への浸透も期待できるので、賛成する。

(井上会長)

では条令名の変更については、賛成としたい。

4. 古賀市子ども・子育て支援事業計画進捗管理

(事務局)

古賀市子ども・子育て支援事業計画について、担当課に事業内容を確認したい事項について挙げていただいたところである。

本日は予防健診課健診指導係長と子育て支援課家庭支援係長が同席しているので、各担当事業についてご意見をいただきたい。

(井上会長)

古賀市の4ヶ月健診、10ヶ月健診の受診率を尋ねたい。

(健診指導係長)

平成27年度の実績となるが、4ヶ月健診は97.5%、10ヶ月健診は96.5%であり、いずれも医療機関受診としている。

(井上会長)

医療機関受診としては高い受診率だと感じる。どのような勧奨を行っているのか。

(健診指導係長)

毎月に医療機関より受診者の報告がある。そこで未受診者を抽出し、電話にて勧奨をおこなっており、近年この受診率を維持している。

(梯委員)

他自治体では4ヶ月、7ヶ月、10ヶ月と集団健診を行い、気になる子どもの早期発見に取り組んでいる。古賀市では現在どのような体制をとっているのか。

(健診指導係長)

1月あたり40人ほど健診該当者がいるが、そのうち10人ほど気になる子どもを抽出し、保健師等がまず電話にて支援を行う。電話支援の中で更に気になる子どもについては発達ルームに繋いでいる。

(梯委員)

古賀市ではIPPO事業等で0歳児支援に取り組んでいるが、進捗はいかがか。

(家庭支援係長)

IPPO 事業については、母親同士の対話を通じて、体験的に子育てを学ぶ事業であり、おおむね4ヶ月未満の乳児について行うもの。全戸訪問の中で、気になる家庭については事業への参加を勧奨している。ただ現在定員を超えての申込みをいただいております、抽選にもれた家庭については、7か月っこ広場事業等への参加を奨めている。その中で気になる子どもについては関係課等に繋げている。

(角森委員)

現在の事業で行っているのは「市が」気になる子どもに対しての支援である。不安を抱える親を支援する仕組みが必要ではないか。母親から「どこに相談したらよいかわからない」という声をきくが、全戸訪問事業等の中で、一組一組の親子に寄り添う制度はできないか。

(家庭支援係長)

古賀市でも妊婦から就学前までの窓口の一本化を検討している。

(角森委員)

児童虐待への対応についてはどういう体制か。

(家庭支援係長)

児童虐待対応で一番大切なのは、情報を共有し、適切な保護・支援を行うことと考える。必要に応じて古賀市、スクールソーシャルワーカー、児童相談所等を交えた個別ケース会議を行うとともに、家庭の問題や、その家庭が今どこに繋がっているか等の情報を共有し、定期的に行う実務者会議で各家庭の現状を把握するようにしている。

(大和委員)

包括支援センターについてはいかがか。

(子育て支援課長)

妊婦から就学前の支援については、現在2課で行っているが、相談窓口を一本化するよう検討を行っている。子どもの発達や要保護等も含めてどのように一本化していくのか、機構改革を含めて、現在検討をすすめているところである。

(井上会長)

検討にあたっては、スクールソーシャルワーカー等の意見を交えて行って検討して欲しい。

(加藤委員)

4ヶ月健診、10ヶ月健診の受診率をさきほど聞いたが、残りの2.5%、3.5%への

対応はどうなっているか。

(健診指導係長)

まずは電話にての確認を行い、連絡が取れない場合は直接訪問を行う。それでも会えない場合は、家庭支援係と連携して子どもの存在を確認している。

(井上会長)

存在が確認できない子どもはいるか。

(健診指導係長)

外国籍を含めると100%ではないが、おおむね存在の確認はできている。

(井上会長)

メディア啓発事業やブックスタート事業は行っているか。

(家庭支援係長)

メディア啓発事業はブックスタート事業の中でチラシによる啓発を行っている。ブックスタートの事業は実施しており、配布率はおおむね70%である。

(桑野委員)

4ヶ月健診については集団健診を行う自治体も多いが、医療機関受診にするメリットは何か。

(健診指導係長)

集団健診では小児科医師の確保が困難となってきた実情がある。他には集団健診では日時場所が指定されるが、医療機関受診であれば本人の都合に合わせることが可能である。

(桑野委員)

病院へ行くことに対する抵抗は無いか。

(健診指導係長)

予防接種も医療機関で行っているので、抵抗は無いのではないかと考える。また健診を機にかかりつけ医を作って欲しいとも考える。

(高橋委員)

以前外国籍の親子の支援に携わった際に、予防接種のため病院に行き、その病院に信頼感を持ち、以降かかりつけ医になったケースがあった。その後は支援なしでも病院に相談できるようになっている。

(井上会長)

全ての相談を病院で受けるのも困難であるので、適切な相談先を設置することも大切である。

(梯委員)

7か月っこ広場、1歳誕生広場等の親子相談事業について、相談に従事する職員体制はそうになっているか。

(家庭支援係長)

家庭支援係の保育士と保健師で相談をうけている。

(梯委員)

以前は発達ルームも一緒だったと記憶している。

(高橋委員)

予防健診課と連携して、体重の確認等を行っていると思う。

(井上会長)

他になければ以上とする。

5. その他

(事務局)

報告事項として、今年の4月から病児保育事業を福岡東医療センターにて定員3名で開始する予定である。

次回2月7日の会議では進捗管理と小規模保育新設に係る審議をお願いしたい。

(桑野委員)

現在鹿部保育所にて行っている病後児保育は継続するのか。また利用人数はいかがか。

(事務局)

病後児保育についても継続して行うこととしている。利用者数については平成28年9月時点で古賀市児童6名、新宮町児童18名の合わせて24名となっている。

(井上会長)

他になければ以上とする。

会議の経過を記載して、その相違ないことを証するため、ここに署名する。

平成 年 月 日

会 長

署名委員